KANTO GLOCAL

グローカル関東

Vol.4 January 2011

Special Features

茨城から生まれた潮流

建設コンサルタンツ協会関東支部では、広く一般の方々に私たちの活動に触れて頂きたいとの思いを込めて、グローカル関東を発行しております。

KANTO GLOCAL
グローカル関東

Vol.4 January 2011

CONTENTS

02 MESSAGE **茨城のＤＮＡ**

04 座談会 **茨城からのイメージ発信**

10 特集1 **野菜や果物等の販売を通して コミュニケーションを育む 「いばらき市」**

12 特集2 **企業城下町日立市における 地域企業振興**

16 特集3 **つくば3Eフォーラムのめざすもの**

18 特集4 **大洗町から発信**
日本初のユニバーサル・ビーチと大洗海の大学

22 坂東の原風景

24 LOHASな土木

26 技術人に聞く

28 関東支部活動紹介／事務局だより

29 地域委員会だより／編集後記

表紙：偕楽園の桜と好文亭（写真提供　茨城県）

特集
Special Features

茨城

茨城から生まれた潮流

茨城は、関東地方の北東部に位置し、緑豊かな北部、水戸市のある中央部、鹿島臨海工業地帯を有する東部、つくばエクスプレス沿線など開発の進むベットタウンのある南部と多彩な表情を持っている。しかしながら、茨城の持たれているイメージに関する調査によると、地味、素朴、納豆といったものが上位を占めており、茨城の魅力が必ずしも浸透していないように思える。本特集では、そんな茨城が日本や世界に発信している多彩な魅力を紹介し、茨城の本来の姿に迫りたい。

霞ヶ浦の帆引船（写真提供　茨城県）

インタビュー

茨城のＤＮＡ

俳優　渡辺 裕之

僕は高校まで茨城にいて、夏はすぐ近くで海水浴、冬はアイススケート、月に一、二回は隣県の福島や栃木にスキーに行くという感じでした。でも、それが当たり前すぎて、茨城が恵まれた土地だということに気がついたのは東京の大学に入ってからです。

豊かな四季以外にも、メロンなどの農産物やつくばの学園都市、筑波山に偕楽園と茨城が誇れるもの、茨城発祥のものは沢山あります。

人もその一つで、当時としては珍しく、水戸の殿様は庶民派だったのです。偕楽園は、迎賓という意味もあって徳川斉昭が造ったのですが、迎賓という割には、建物らしい建物は好文亭くらいしかなく、庶民の憩いの場だったのです。斉昭は自ら畑仕事を手伝うなど、相当に頭の柔らかい人だったのです。茨城はそういう精神の発祥の地でもあるのです。

茨城には「どうせ」という思いがあります。「どうせ国のことを憂いてやっても結局は悪く扱われる」ということです。桜田門外の変では、井伊大老も水戸藩も、どちらも国のことを憂えているわけです。国のためによかれと思ってやっているのです。しかし、二人の間には幕府という壁があり、あのような事件になったと僕は思っています。

ですが、そんな茨城も変わりつつあります。茨城は知名度が低いということで、『桜田門外ノ変』の映画化を企画した人たちが居たのです。

「水戸黄門でいいよ、納豆とあんこだけでいいよ。宣伝しなくてもいいよ」という県民性の人たちを炊きつけて動かしたのです。

制作委員会を作って、県民から一口二〇〇〇円の支援金を募って、なかには多額の一〇〇〇万単位の人もいて、全部で七億五〇〇〇万円を集めたのです。

公開から、六〇万人以上に観て頂き、興行成績としては三〇〇館以上で上映されているのですから、大成功です。

でも成功したことよりも、茨城の人間が立ち上がったことがすごいと思います。これこそ事変です。

地元の協力もすごいものがありました。エキストラ延べ四五〇〇人、ボランティア一五〇〇人が携わり、京都に撮影現場が移っても、自費で京都に来てくれる人がたくさんいました。自費で炊き出しをやって、エキストラの人数が足りなければ夜中でも駆けつけ、寒いところで頑張ってくれたのです。

国を憂い、命がけで戦った当時の人の生き方と同じものが、今でも茨城県人の中に息づいていて、それに火が灯ったからこそ、そこまで出来たのだと思います。

火が灯ったのですから、これを絶やさないようにしていかなくてはいけません。

僕の役はそんなに大きなものではありませんでしたが、岡部三十郎を演じて、この作品から熱を貰いました。この作品によって、自分のなかに茨城県人のＤＮＡが息づいていることに気付かされました。正直に言うと、今まで自分にそんなものはないと思っていました。そんな僕が、クランクアップしたら後も、いまだにこの作品に関わっています。歳をとって望郷の念に駆られるようになった事も手伝って、今では茨城が大好きです。

昨日も、僕の母校である水戸商業に、ＯＢとして講演に行ったのですが、非常に有意義でした。全員がかわいくて仕方がないのですよ。一〇〇〇人の高校生全員が息子・娘みたいでした。

今も茨城に帰るたびに、熱意を持って茨城のために挑んでいる仲間と飲んだり話したりしますが、皆本当に真剣です。既成のルールや訳のわからない障害なんか飛び越えてやろう、という人が沢山います。彼らこそ水戸藩士ですよ。

十一月にツール・ド・ひたちなかというイベントがあって僕も参加しますが、そういうのがもっと盛んになるといいなというような話もしています。

先日も自転車で那珂川沿いを五二キロ走ったのですが、水戸はサイクリングロードが途切れ途切れです。那珂川は、特に下流

に向かう景色は最高なので、河口の那珂湊で生カキを食べて水戸に帰ってくるコースを造ったら、きっとサイクリングが水戸の新たな文化になります。

新たな水戸藩士が生れた今、茨城は変わっていくでしょうね。そのための土台として、「茨城県人なら最低これくらいは知っていろよ」というものを広めていかなければならないと思っています。教養の内需とでも言うんでしょうか。ルーツや歴史を含めて、茨城の人たちは、自分自身のことをもっとよく知る必要がありますよね。

映画「桜田門外ノ変」襲撃シーン

渡辺 裕之 プロフィール
（わたなべ ひろゆき）

一九五五年水戸市生まれ
映画「オンザ・ロード」で俳優デビュー。
「だいじょうぶマイフレンド」「ウインディ・ストーリー」と立て続けに映画出演。
その後、フジテレビ系列で放送された「愛の嵐」以降、映画、テレビドラマ、テレビコマーシャルと幅広く活躍。
二〇一〇年水戸藩開藩四百年記念映画「桜田門外ノ変」に岡部三十郎役で出演。
また、ジャズドラマーとして東京、横浜を中心にライブ活動中。

座談会

茨城からのイメージ発信

～知られざるその魅力～

林家まる子　原　忠信　青木智也　塩原信夫

2010年10月5日（火）　於：東京国際フォーラム会議室

イメージが無いのが茨城のイメージ!?

司会――茨城県は、「納豆」、「光門様」、「偕楽園」などの『水戸ブランド』や、「研究学園都市」、「つくばエクスプレス」などの『筑波ブランド』、さらには「あんこう鍋」、「霞ヶ浦」、「日立」、「鹿島アントラーズ」といった多様な地域資源を持っています。ところが、県外からは、とりわけ「自然が豊かで地味・素朴」とのイメージが強いようです。なぜ、こうした一面のみが強調されたイメージが発信されているのでしょうか。もっと茨城の多面性を伝えるためには、どのようなことが求められるのでしょうか。

本日は、皆様に茨城の知られざる魅力を紹介して頂きながら、これからの茨城のイメージ発信のあり方について考えてみたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

早速ですが、皆さんが感じられている「茨城の持たれているイメージ」とはどのようなものでしょう。

林家――県外からの茨城のイメージには、「すごい訛っているね」というものがあります。友人に赤いプルトニウムという茨城弁を駆使する茨城出身の芸人がいるのですが、茨城県民はみんなあのくらい訛ってるのだろうという妄想を持たれていますね（笑）。あと、関東地方以外の方だと、そもそも茨城がどこにあるのかわからない。それと、茨城のメロンは日本一の生産量なのに、知名度では夕張メロンと静岡メロンに負けている。実はコシヒカリも生産量日本一なのに、新潟に負けている。たくさん日本一があるのに、あまり認知されていないという面では残念ですね。

林家――主人から、「茨城ってどこにあるの?」と聞かれた時は、衝撃的でした!主人は関西人なので、私がリポーターを務めているテレビ番組「おはよう茨城」も、てっきり大阪の茨木市だと思い込んでいたらしいのです。茨城は、場所からして知られていないので、県のイメージ以前の問題もあるかもしれません。

青木――「イメージのないのが茨城のイメージ」みたいな……（笑）。

林家――そうなんですよ。「茨城って何だっけ?」と言われるんです。そこで「水戸黄門です。」と言うと、「ああ!」となる。でも、次に筑波山と言うと「えっ、何、それ?」という反応が返ってきます。「西の富士山、東の筑波山なんだけど……。」と言ってもわかってもらえない。袋田の滝も「何、それ?」です。ですからイメージとしては、「水戸黄門、納豆……以上!!」みたいな感じです（笑）。

塩原――特に関西以西からはそうですよね。関西圏から関東に新幹線で来ても、一旦東京駅で降りなければならないこともあり、どうしてもそこから先、茨城を含めた北関東に足を伸ばす人は少ないです。最近でこそ、茨城空港が完成して、他地域とダイレクトで結ばれるようになりましたが、むしろ一足飛びに行ける東北や北海道の方が、茨城よりも認知度が高いのです。実際、「茨城は水戸の偕楽園」「栃木は日光」といったような一部の観光地を除き、北関東三県（茨城・栃木・群馬）は、関東のイメージ空白地帯というか、首都圏と一緒くたにされているというか、関東の中でも特に県としてのまとまったイメージが希薄だと言われています。

大事なものなのに、近すぎて見えない

青木――筑波山は従来、県民から寂れた観光地として認知されていましたが、つくばエクスプレスが開通して県外の登山者が増えたことで、ようやく県民にも見直されました。「県外の人から茨城の良さを気付かされる」といったことが結構あります。茨城県民は、自分のことに疎いのかもしれませんね。

林家――茨城県民は、茨城の魅力にあまり気づいて

いないんですよね。

青木――テレビの『おはよう茨城』以外、県独自のメディアが少ないので、自分たちの情報を客観的に見ることに慣れていないのだと思います。テレビから流れてくるのは東京の番組ばかりですから、無意識に「自分たちは東京よりも下なのだ、田舎者なのだ」となります。それでたまに茨城が出ると「嬉しい！」となるんですね。

塩原――茨城県民はなんというか…受動的ですよね。自分たちで番組を作るとか、出演者として登場するとかいった機会をもっと増やすことが必要な気がします。

青木――確かにPRすることに慣れていないですね。よく言えば奥ゆかしい、悪く言えば口下手な県民性です。「言わなくてもわかってもらえるから…」ということですね。

原――よくリサーチ会社が県のブランド力ランキングをやっていますね。北関東三県はいつも四〇位台に甘んじています。ブランド力が東京にブロックされてしまい、どうしても顔が見えてこないのです。例えば茨城県は、生産量日本一のレンコンや栗を始め、全国トップ3に入る農産物が一〇品目もあるくらいとても恵まれた土地なのです。さらに、様々な農産物の南限と北限が交わる場所でもあり、例えば筑波山麓ではリンゴ園の隣にミカン畑があったり…。そのような場所は他所にはあまりないでしょう。しかしそうした事実のほとんどが全国に知られていません。農作物以外にも言えますが、茨城は良いモノがいろいろありすぎて、逆に県の魅力を伝えづらいのだと思います。アピールポイントを絞り切れないわけです。

林家――魅力の多さが逆にアダになっているのかもしれませんね。

塩原――今「もったいない」がキーワードになっていますよね。少し前までは、無駄遣いを指してもったいないという使い方でした。しかし今はどちらかというと、あるのだけど使わなかったり、埋もれてしまって「もったいない」という意味で使われています。使っていないものとか知られていないものをどうやって活かしていくかに頭を捻ることも大切です。

原――よそ者的な視点だと、「こんなにいいものがあるのになぜ伝えないの？」と思ってしまいます。

青木――よく言われますね。

原――ふだん接しているものだと、日常的過ぎて逆にそれが本当に良いものかどうか見えていない気がします。

林家――まつげと一緒で、近すぎて見えない。実はすごく大事なものなのに。

■朝もやに包まれる筑波山（写真提供　茨城県）

茨城の尖った魅力を伝えたい

原――私は昨年、筑波大生と共に一カ月間のキャンペーンでJR一四〇〇駅に貼る県の観光ポスターを制作しました。まずは、学生とワークショップを開き、「茨城って何だろう」と定義することから始め、最終的には別方向の三案のポスターを提示しました。第一案は「茨城はいろいろあるのが良いのだよ」という茨城の魅力てんこ盛り状態のポスターでした。第二案は、「都会から近い田舎」をアピールしたポスターです。ターゲットは都会でスローライフに価値観を抱く女性です。ふらっと気軽に来て茨城のライフスタイルを楽しむことを前面に出しました。例えば、笠間焼きの体験塾とか筑波山登山とか、月待（つきまち）の滝でお蕎麦を食べるといったアトラクションを「茨城さん」という架空の女性キャラクターが楽しみながら旅をする趣向のポスターです。第三案は、茨城のヤンキーをイメージしたキャラクター「イバヤン」がJAXAのロケットを見て「デケーっ！！！！！」と叫んでいるような自虐的ポスターです。ある意味ネガティブメッセージなのだけど、それで茨城を押し出すという案を一つ出したのです。正直、ヤンキーは採用されにくいと思いましたが、結構楽しく制作できました。最終的には多様性という点が評価され、第一案のてんこ盛りポスターが採用されました。ただ、そうすると茨城のイメージが逆に拡散してしまう可能性もあり、茨城の魅力がストレートに伝わらないかもな、という思いもありました。

塩原――そこが、県民と県外の人との間で抱くイメージギャップですね。県の方でも、最近は少し尖がった魅力を作っていこうという意識に変わってきていますね。

林家――そういう自虐的なものって、意外とウケたりしません？県民自らがそこをグリグリいじっていったら、面白い展開があるかもしれませんね。

どげんもせんでもいい!?

青木――茨城弁は茨城の特徴ですが、茨城弁で「いいやんべ」という言葉があります。それは標準語で言うと「いい塩梅（あんばい）」なのですが、そういう感覚が茨城にはあります。「そんなに茨城がすごい」という訳ではないのですが、いい按配でちょうど良いくらいに住みやすいし、そこそこ何でもある。全体的にそういう雰囲気があるのではないかという気がします。だ

から、頑張って頑張って極めようという意識はあまりないのです。

林家――ハングリー精神がない？

青木――そうですね。見方によると思います。例えば茨城から東京を見ると、みんなあくせくして一生懸命頑張って仕事をしていると見える訳です。でも茨城はそんなに頑張らなくても楽しければ良いのです。逆の見方をすれば「もっと頑張れるじゃん、茨城！」ということにもなりますが、全体的にそういう傾向にあるのかなと思います。

原――「いい按配選手権」をやったらNo.1ですね。

青木――結構、北関東は強いかもしれないですね。

原――やはり、おおらかというかガツガツしていない良さはあると思います。以前、大分のミカンのブランディングの仕事をしたときは、それこそ「どげんかせんといかん！」という感じでした。三〇〇〇軒あったミカン農家が一〇〇件にまで減っていたので、強い危機感があったのです。ところが、私は今、土浦市の農産物のブランド化の仕事をしているのですが、良くも悪くも和気あいあいと仲良く楽しくやっています。楽しいのは良いことですが、やはりブランド力を上げていくには、もうちょっと危機感がないとね。

青木――私も、ある程度の認知度が必要だ、ブランド力を上げなければ、という気持ちもあります。ただ、大方の県民は「別にいいんじゃないの？　自分はそこそこ幸せだし、逆にそんなに人が来てしまっても困る」という感覚なのかもしれません。「知られていない程度に楽しくやっていたほうが幸せなのではないか」というのもひとつの価値観です。私自身もちょっとそこで揺れるところがあります。

塩原――それは世代的にはどうなのですか？特に若い人はいかがですか。

青木――若い人はブランディングへの意識が強いと思いますし、年配になればなるほど保守的で「今のままで幸せなのではないか、逆に新しい人が入ってくると怖い」となります。そうした世代間の意識の差はあると思いますね。

原――価値観は変わっていくものではないかと思うのです。都会に住む人々がスローライフで有機的なものを大事にするようになると、茨城県民もおのずとそちらに目がいくようになる。すると、体に良いものを食べて健康的に過ごせて、ある程度都会の近くで生活出来る茨城ライフスタイルの魅力を見直す人も出てくる。少しづつ、茨城県民の間でもそうした発想が生まれれば、茨城は、都会の人々が憧れるライフスタイルを送れる地域だとの自信が芽生え、茨城も自ずと変わっていくかもしれませんね。

原　忠信（左上）
筑波大学講師

林家まる子（右上）
TVリポーター／いばらき大使

塩原信夫（左下）
茨城県広報広聴課
広報戦略室広報監

青木智也（右下）
茨城をこよなく愛し茨城復権運動を提唱するイバラキスト

林屋まる子の一押し「どぶろく！」

林家――私がすごく好きでお勧めなものの一つに、農家民宿のどぶろく体験があります。あまり知られていませんが、北茨城市にどぶろく特区という、どぶろく作りが認められている場所があるんです。農家民宿でやっているので、自然を体験しながら一緒にどぶろくを作って農家の方と一晩過ごすのです。父と一緒にロケで行ったのですが、それ以来すっかりハマってしまって、もう「どぶろく！どぶろく！」ですよ。お酒がシュワシュワ生きていて、ものすごく美味しいんです。そこで暮らす人々との触れ合いや農家に泊まるという体験も楽しいですし、畑から引き抜いたレンコンとかニンジンを食べながらどぶろくで一杯やるというのが、なんとオツなものか！という感じです。

青木――最高の贅沢ですね。

林家――そうなんですよ。なのに、なぜか県内でさえあまり知られていないんです。

青木――逆に知られていないからちょっと良かったりするかもしれませんね。知られたくないというか、その微妙なさじ加減とバランス感覚がいいですね。あえて都会の人々に余計な情報を与えず「別に茨城なんて！」という先入観を持たせておき、それで「どぶろくってこんなにすごかったんだ！」となると、最初の期待値が低かった分だけ感動が高まるのではないかと。

林家――「このどぶろくで成功しないと人生立ちゆかない」ぐらいのハングリーさがあれば、その農家の方も頑張ると思うのですが、余力でやっているとそうはなりませんね。

原――その魅力は伝えたいですね。

林家――和製シャンパンといってもいいくらいです。甘くておいしくて、お米の良さが引き立っている。しかも、誰がどう作っているのか訳がわからないお酒で

はなくて、目の前でお米を炊くところから始まっている、誰がどう作っているのか訳がわかるお酒なんです。どぶろく特区ツアーなんていかがでしょう。私、ツアーガイドやっちゃいますよ。

原――そうすると、作ることからの体験全てをブランディングしたほうが良いですね。例えば、都会の人が、農業体験をして、お米を炊いてどぶろくを作る。そうした一連の経験価値というか。例えば、ディズニーランドも体験じゃないですか。別にそこで何か買うとかではなく、そこへ行って楽しむ価値の高さ。それを茨城のどぶろくでやるというのは面白いかもしれませんね。

林家――婚活ツアーも良いかも。一緒に体験しながら仲良くなって頂き、そして結婚して、県内に家を構えて子供を産んで、税収を増やしていくということですね（笑）。

メディアを使った発信

塩原――青木さんは、Ｗｅｂサイト『茨城王』での情報発信をされていますね。

青木――サイトを立ち上げるときに、世の中に、あまり茨城に関するＷｅｂサイトがなかったこともあり、特化してやろうと思ったのですが、先ほどの話のように地元の人が地元を知らないケースが結構あるのです。ですから、私はそのＷｅｂサイトで県外よりまず県内に啓発しようと思いました。茨城の人が自分たちの良さをわかってＰＲする方向にならないと、いくら上流でやっても地元には浸透しない。例えば、茨城に旅行で来られた方に、「ウチには何もないよ」とつい言ってしまいがちですが、そこから変えていかなければならないと思うのです。方言や内輪ウケになってしまっている点もありますが、そういうことを念頭に置いてやっています。

司会――イバヤンについては？

青木――そうですね。やはりヤンキーも、事実としてどうしようもない部分があるわけです。それが嫌だという気持ちもあるし、品が良いほうが好みなのですが・・・これは、やはり笑いに変えるしかないと思いました。方言にしてもそうです。やはり訛っているものはしょうがない。方言というのは、昔なら遅れていて、何だか怒っているみたいで荒っぽくて品が悪いというイメージがあったのですが、今はそれが田舎ならではの良さともなるのです。でも茨城弁は、例えば関西弁などと比べてもどうしても笑いにつながりやすいので、まじめなことを会議で言っても茨城弁だと笑われてしまうみたいなところがあります。それが茨城県人のコンプレックスですし、方言で笑われるのが嫌でしゃべらないのです。しかし、逆の発想で、茨城県民自身が笑い飛ばしてしまえば良い、という感覚を持てば変わるのではないかと思います。それで茨城弁を取り上げて、茨城県民同士で笑おうよという発想です。Ｕ字工事さんはそういった発想を栃木弁で取り入れて成功した例と思いますが、まさに同じ感覚かなと思います。

林家――磯山さやかさんも昔やっていたテレビ番組『なまり亭』でブレイクしたんですよね。茨城ヤンキーも映画『下妻物語』で全国区になったので、ちょっと嬉しかったです。

塩原――映画というのは、そういう意味で伝える力を持っていますからね。一〇月一六日からはいよいよ※映画『桜田門外ノ変』が封切られます。歴史モノはどうしても年配の方が好まれる傾向がありますが、最近は「歴女」であったり「歴ドル」であったりと、ひとつの幕末ブームですし、今年でちょうど水戸開藩四〇〇年、事件から一五〇年という時代の変わり目ですからね。テーマが暗殺ということで、これまではなかなか取り上げづらかった桜田門外の変ですが、やはり事件そのものも知って頂きたいし、その背景となった人々の生き様を感じ取って頂きたいという茨城の人々の思いが、桜田門外の変を映画化するきっかけとなりました。

司会者――映画のお話が出て思い出しました。茨城は、映像制作会社が集中する東京から近い上、変化に富んだ自然にも囲まれていて、様々な撮影シーンに対応可能なロケ適地がたくさんですよね。大河ドラマ『龍馬伝』のオープニングテーマシーンも、実は県内の浜辺で撮影されたものだったとか。

塩原――そうなんです。そうした条件が揃っていることか茨城はロケ地の数で日本一になったんです。ロケ地選定の非常に重要な要素の一つに、地域の人々の支援があります。映画『桜田門外ノ変』も、地元の

■知る人ぞ知る　どぶろく特区
（写真提供　茨城県）

■どぶろくを味わいながら「日本一の栗おこわ」なんていかがですか？
（写真提供　茨城県）

■筑波大生が地域住民や職人と共に改修した岩崎屋（つくば北条）にて
（写真提供　原　忠信）

■茨城王ウェブサイト

方が支援の委員会を発足させ、炊き出しして頂いたり、エキストラで出演して頂いたりしました。そうした支援がないことには、ロケ地は成り立ちませんからね。単純に風景が良いとかセットが組まれているだけではなく、地元の理解を得て参加して頂くのがロケ地の条件なのです。そうした気持ちで迎えてくれる人々が居るのも茨城の大きな財産です。

林家――茨城は魅力的な人が多いですよね。私は茨城の財産は人であるとずっと思っていて、これが宝物だから、この人たちがどんどん輝いていけるような県を作っていけば、おのずから県も輝いてくるのかなと思っています。

※映画『桜田門外ノ変』…水戸開藩四〇〇年を機に茨城県民が発案し、多くの県民ボランティアが参加して完成した、まさに「茨城産映画」。昨秋、全国で一斉に封切られ、観客動員数六〇万人以上を記録する大ヒット作品となった。

目指すべき方向

司会者――最後に一言ずつ、今後、茨城県のイメージを発信していく上で、目指すべき方向性のヒントをお願いします。

青木――茨城はまだまだ知られていないので、それは良い意味で穴場となります。私は関東最後の穴場だと思っています。皆さん、それまではそれほど期待値が高くなくても、実際に行ってみたら実はすごく良かったとか、逆にそういった点を逆手に取って茨城の価値を高めていけたら面白いのではないかと思います。イメージ発信の方向性については、改めて新しく何かを作るよりは、今あるものの良さに茨城県民自身がまず気づくことが第一段階です。

原――価値観の転換という発想を以てすれば、茨城が一番かっこいいとか素敵な県になれる可能性は本当にあると思うのです。そこでトップを走れる県になったらすごく嬉しいなと思います。そういう意味では、これまでには無い新たな指標を作ってしまって、ナンバーワンになってしまうということができればと思います。学生にもそうした茨城の魅力に気づいてもらいたいですね。例えば筑波山麓に学生と一緒に豊穣米を作りに行き、学生主体で、自分たちの価値観で楽しみながらやることが、価値観の転換になるのではないかと考えています。実際、筑波大学では、『アートデザインプロデュース演習』という全学年対象の授業で筑波山麓の地域活性化に取り組んでいますが、筑波山麓の魅力に若い子がはまっています。そうした流れはこれからも大きくなっていくのではないかなと思います。

林家――私は林家一門なので、なぞ掛けでいきます。「えー、茨城県と掛けまして、お気に入りの洋服と説きます」。

一同――その心は？

林家――「一度着(来)たらまた着(来)たくなります。」ぜひ一度来てみてくださいということです！

一同――おぉ～!!(笑)

林家――今、都会の人々は疲れているので、「茨城に来たら絶対に元気になるよ」と言われたら、行きたくなると思うんですよね。ですから私は、茨城をエネルギーチャージの場にしたいと思います。実際そういう場所ですし、私は今、そういう思いで「おはよう茨城」のリポーターをやらせて頂いています。これからもそういう方向性でアピールしていきたいと思います。

塩原――これからは若者にとって魅力あるまちづくり、特に女性が来て楽しんで頂けるようにしなければならないと思っています。女性の持つ時代感覚は男性よりも鋭いですから。女性に受け入れられれば、その魅力は自然とそのお子さんにも伝わり、そしてお年寄りにも優しいまちづくりへと……その輪は果てしなく広がっていくでしょう。

■ロケ風景（写真提供　茨城県）

■殺陣の練習風景（写真提供　茨城県）

■映画『桜田門外ノ変』の出演者（写真提供　茨城県）

林家まる子（はやしやまるこ）（TVリポーター／いばらき大使）

東京都武蔵野市出身。

両親は林家三平一門で夫婦漫才で環境カウンセラーの林家ライス・カレー子、弟は江戸太神楽曲芸師の翁家勝丸という芸能一家。自身は師匠の林家こん平を仰ぎ、寄席で三味線漫談を持ち芸とする一方、テレビではガチャピン・ムックのお姉さん役のほか、リポーターを中心に活躍。

特に「おはよう茨城」（フジTV毎週日曜六時一五分～六時三〇分）では一三年目のメインリポーターを務める縁から、いばらき大使に就任。茨城県民グラフ誌『フォトいばらき』では、二〇〇七年より八林家まる子が行く！常陸国フード記〉で食の王国いばらきの農林水産物を連載中。

ご主人は、二〇〇二年に全日本ライトフライ級新人王を獲得した國重　隆（現ワタナベジム）。

趣味はインテリア、ホームパーティー。

原　忠信（はらただのぶ）（筑波大学講師）

宮城県出身。

筑波大学で建築デザインを専攻後、同大学院修士課程で視覚伝達デザイン修了。ロードアイランドスクールオブデザインでのグラフィックデザイン専攻後は、サスマンプレジャアンドカンパニーでデザイン計画や環境デザインを手がける。

マーチファースト社では、アップルコンピュータ、ピクサーアニメーションなどの統合マーケティングコミュニケーションプロジェクトに関わり、電通イーマーケティングワン社ではクリエイティブディレクターを務める。その後、『爽健美茶』イメージデザインも担当するなど、幅広い活躍を経た後、現在は筑波大学大学院人間総合科学研究科（芸術学専攻ビジュアルデザイン領域）にて、ブランディング、デザイン方法、ソーシャルデザインに関わる制作と研究について講義中。筑波大生と共に作成した茨城県イメージポスターは、二〇〇九年一一月、全国のJR主要駅に掲示された。

趣味は筑波山系でのマウンテンバイク。

青木智也（あおきともや）（茨城をこよなく愛し茨城復権運動を提唱するイバラキスト）

茨城県常総市（旧石下町）出身。

県立下妻一高卒後、都会に憧れて明治学院大学社会学部へ。卒後、ソフトウェアメーカーに就職し、一年半の横浜勤務をしたのち、茨城へUターン。

帰郷後は派遣社員などをする傍ら、茨城No.1のサイトを目指しホームページを立ち上げるが、志半ばで頚椎骨折という大事故を起こす。九死に一生を得て社会復帰を果たしてからは新たな人生観のもとでホームページを『茨城王（イバラキング）』としてリニューアルオープン。一日一〇〇〇アクセスを誇る人気サイトとなる。

二〇〇四年には初の著書『いばらぎじゃなくていばらき』、二〇〇六年にはその続編にあたる『続いばらぎじゃなくていばらき』を出版。現在は執筆、講演、ラジオ出演などの他、「茨城」をテーマに幅広い分野で活躍。

二〇〇六年茨城イメージアップ大賞実行委員、二〇〇七年茨城県まちづくりアドバイザー、二〇〇九年常総ふるさと大使を歴任。

趣味は、テニス、ラーメン食べ歩き。

■林家まる子さんは県民グラフ誌『フォトいばらき』でも活躍中！（写真提供　茨城県）

■茨城県観光ポスター　幻の「いばやんバージョン」！（写真提供　原　忠信）

■「おはよう茨城」は、旬でレアな穴場情報を県外の皆様にもお届けしています！（写真提供　茨城県）

塩原信夫（しおばらのぶお）（茨城県広報監）

東京都豊島区駒込出身。

都立小石川高校、慶應義塾大学経済学部卒業後、ホンダに入社。企画部門、北米部門を経験する。

広報部門が長かったことから、ホンダがアメリカで企業広報を委託したピーアール会社の日本支社立ち上げに加わり、企業広報、危機広報、CSR（企業の社会的責任）を受け持つ。

その折に、才能ある若手映像作家を世に送り出すことを使命とするネット映画祭（Con-Can ムービー・フェスティバル）のピーアールを担当。

この映画祭をCSRとして主催するメディア総合研究所に入社、映画祭プロデューサーとして、世界各地の映画祭、映画産業に携わる人たち、映像学科を持つ大学との連携づくりに奔走する。

二〇一〇年　茨城県広報監として入庁。県のイメージアップのため、民と官が手を携えての情報発信力強化に取り組んでいる。

趣味は、幕末歴史散策、下町B級グルメ食べ歩き、映画・絵画鑑賞。

司会　（社）建設コンサルタンツ協会関東支部　広報委員）

特集1

野菜や果物等の販売を通して コミュニケーションを育む「いばらき市」

谷川 公平（宍戸国際ゴルフ倶楽部 いばらき市マネージャー）

東京・六本木、朝六時頃から、多いときには五〇個近く、買い物カゴがずらりと並びます。

この行列の正体は、茨城県から届いた新鮮な野菜を待つ「いばらき市」の常連客たち。

都心のど真ん中で、生産者の顔がわかる産地直送の新鮮野菜や果物を安価で購入できる「いばらき市」は、地域住民の方から好評を博しています。

■「いばらき市」開催の様子（六本木ヒルズ）

二〇一〇年一月には、茨城県による「いばらきイメージアップ大賞」奨励賞を受賞しました。「六本木ヒルズの名物イベントとして定着し、茨城県の農産物をPRしていること」「今後も日本の食を支える茨城農業の発展に貢献することを期待する」という二点が評価されました。

「いばらき市」開催のきっかけ

六本木ヒルズで朝市？って、連想しがたいことかもしれませんが、今では、多くのマスコミに取り上げていただくなど、近隣住民にとっては、なくてはならない存在になっています。

■多くのお客様で賑わう様子（六本木ヒルズ）

「いばらき市」のスタートのきっかけは、「再開発前のこの場にいた住民、新しく入居した六本木ヒルズの住民、そして周辺住民のコミュニケーションの場をつくりたい」「茨城県に森ビルが経営するゴルフ場が二ヶ所あり、この地域と都会をつなぐことはできないか」「都心に住む人に生産者の顔がわかる安全で安心な新鮮な野菜などを提供できないか」といった理由です。

「いばらき市」は、六本木ヒルズがオープンした半年後の二〇〇三年一一月にスタート。以後、毎週土曜日の朝七時からお盆、正月を除き、雨の日も雪の日も休まず営業を続けています。

「いばらき市」開催に向け、生産農家を発掘することからスタート

ゴルフ場を運営する私たち素人が、新鮮な野菜などをしっかりと仕入れることが出来るか、不安でしたが、最初は知合いの農家からの紹介で始まり、その後人の輪が広がり六〇件の農家さんとの取引ができるようになりました。仕入れは、毎週月曜から水曜までに契約農家を回り、畑の状況や農産物のでき具合などを確認し、出荷量の調整をし、木曜から金曜で一軒一軒自分の足で農家を

■ヒルズマルシェの様子（アークヒルズ）

■「いばらき市」出店の様子（アークヒルズ）

回り集荷をする流れです。現在では、量と品数を確保するために、地元石岡青果卸売市場の鑑札を取得し、さらに、より幅広い商品の提供と、品質や効率性を考え、取引する農家さんも二〇件に絞ってきています。

厳選されたこだわりの「いばらき」の野菜

「いばらき市」に並ぶ厳選されたこだわり野菜を四件紹介します。年間通して人気ナンバー1の商品は、吉田さん（土浦市霞ヶ浦）が作るれんこん。EM農法栽培で農薬をほとんど使わず、より安心で安全。八月から新物が出回り、とても柔らかく食感もよりシャキッとしています。堀江さん（常陸大宮市）が作る原木しいたけは山の奥で一本一本丁寧に栽培されていて、とても肉厚でジューシー。そのほかに栄養価が生より高い干ししいたけや、しいたけを粉末にした焼肉のたれなど関連商品も人気商品です。広瀬さん（土浦市）は、だいこんやキャベツ、にんじんなど十種類以上の野菜を作り、少しでも品質が気に入らないと絶対に出荷しないなど、こだわりも超一級。年間通して広瀬さんの作る野菜が並ばない日はないぐらい。最後に鶴井さん（笠間市）は、ルッコラやズッキーニ、ビーツなどのあまり馴染みのない野菜をハウスで丁寧に栽培しています。特にズッキーニは人気商品の一つで、稀に冬瓜（とうがん）のような大きなものも出荷されます。ほかにも農家の方が一生懸命心を込めて作ってくださった新鮮な野菜などがたくさんあります。農家さんの協力がなければ「いばらき市」は成功しません。

いばらきと六本木を結ぶコミュニケーション

「いばらき市」は、実際に生産農家さんも東京に来て「茨城弁」で応対、常に新鮮な野菜を提供し、その野菜を使った料理の方法などをお客さんにアドバイスしています。六本木ヒルズ自治会のメンバーも毎週七～一〇人、ボランティアとしてレジ打ちなどを手伝い、お客さんとのコミュニケーションも積極的になっています。

実際に利用されている方からは、「安くて新鮮はもちろん、なによりも長持ちするので無駄なく使える」「野菜の保存方法やいろいろな料理の仕方などをいばらき市のスタッフや他のお客さんから教わった」「いばらき市を通して近隣の方々と会話も増え仲良くなった」など、当初開催の目的であったコミュニケーションの場として機能し、さらに食の王国茨城県の魅力を伝えられる場になってきています。

これからの「いばらき市」

六本木ヒルズでの「いばらき市」の盛況を受けて、二〇〇六年一一月よりアークヒルズでも「いばらき市」を開催、二〇〇九年九月からは、全国の農家や団体が参加する「ヒルズマルシェ」へと拡大・発展させ、「いばらき市」も一出店者として参加しています。

毎週土曜日、六本木ヒルズでの「いばらき市」が終了すると、すぐにアークヒルズに移動、そのまま、一四時までいばらきの新鮮な野菜の販売を行っています。毎回二〇〇〇名以上の方が訪れる「ヒルズマルシェ」でも、「いばらき市」の商品は大人気です。

一時的なイベントとして実施するのではなく、同じ場所で継続的に実施する「いばらき市」。そうすることで、多くのお客さまに利用していただき、茨城県の魅力を多くの方に伝えることができると信じています。

谷川 公平　プロフィール
（たにかわ こうへい）

1985年8月23日生まれ、茨城県出身茨城県立日立商業高等学校を卒業し地元の生鮮食料品スーパー（株）八百邦に入社、野菜・フルーツの販売を担当。平成21年に生鮮食品の仕入販売の経験を生かし、（株）宍戸国際ゴルフ倶楽部に入社、六本木ヒルズいばらき市、アークヒルズマルシェのマネージャーとして活躍中。

「いばらき市」開催概要

日時：毎週土曜日　7：00～　売り切れ次第終了
場所：六本木ヒルズ　イーストコート
（東京都港区六本木6-10-1ほか）
問　：03-6406-6000
（六本木ヒルズ総合インフォメーション）

「ヒルズマルシェ」開催概要

日時：毎週土曜日　10：00～14：00
場所：アークヒルズ　アーク・カラヤン広場
（東京都港区赤坂1-12-32）
問　：03-6406-6619　（平日10：00-18：00）

特集2

企業城下町日立市における地域企業振興

内山 茂身（財団法人 日立地区産業支援センター 事務局長）

企業城下町日立市の成り立ち

日立市は、株式会社日立製作所の創業の地である。日立製作所は、二〇一〇年に創業一〇〇周年を迎えた。この日立鉱山の修理工場から日立製作所が始まった歴史は、広く知られている事実である。

日立市は、日立製作所と日本鉱業（現JX日鉱日石金属株式会社）の二つの大企業の発展とともに街が形成されてきた典型的な企業城下町と言えよう。

産業面では、発電プラントなどの電気機械を中心に一般機械、金属製品、化学製品等を製造している工業都市であり、出荷高は最盛期（一九九五年）には一・六兆円を超え、全国の工業都市の中では二〇位前後に位置していた。

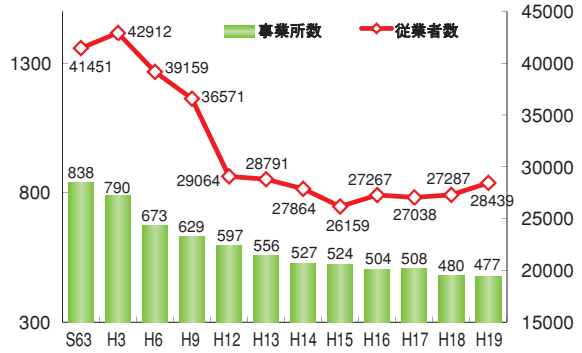
日立市には、日立製作所の他に日立電線株式会社、日立化成工業株式会社等の「日立グループ企業」と呼ばれる大企業、中堅企業の事業所が多数立地している。

これら大手企業は、製造コストの低減と規模拡大を目的に、機械加工、製缶・板金、組立などの多様な工程を日立市とその周辺市町村（以下日立地域と呼ぶ）の中小企業に外注（一次）してきた。さらに、その中小企業から地域内の小規模企業へと再外注（二次）が行われてきた。

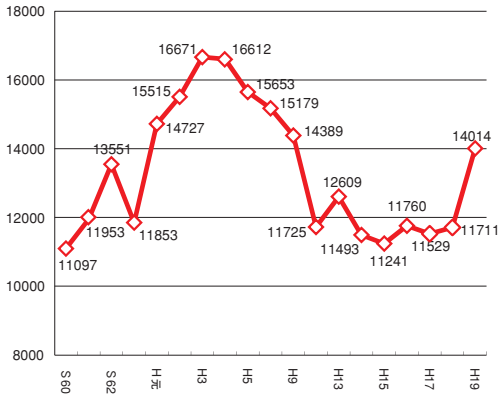
このように、日立地域の製造業は、日立製作所およびそのグループ企業を頂点とし、外注された仕事を受注する数多くの中小零細企業が底辺を支える「閉ざされた生産ピラミッド」の構造をもっていた。

バブル経済崩壊の後、東アジアや東欧の諸国との価格競争が顕在化した結果、日立製作所も生産拠点を段階的に海外に移転し、加えて部品の国際調達を進めるようになった。その結果、日立製作所及びグループ企業を頂点とした生産ピラミッドが崩れる中で、下請企業は親会社からの受注量が激減し、企業の存続を脅かされる事態となった。

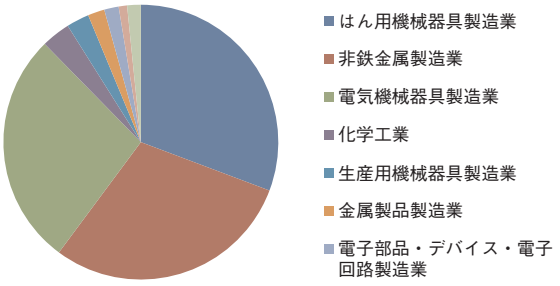
日立製作所は、従来のような仕事量を外注できないことを理由に下請中小企業に対し、日立グループからの自立化を求めた。



■図1　製造業事業所・従業員数（4人以上）



■図2　製造品出荷額（億円）



■図3　産業別製造品出荷額構成比（平成20年度工業統計調査）

しかし、それまで、この地域の大多数の中小企業は、日立グループからの専属的な下請けで成り立っていたため、受注先の多角化（他のメーカーからの受注）に必要な設計力、開発力、営業力が全く不足しており、この問題に対応することが喫緊の課題となっていた。

日立地区産業支援センターの設立

そのような経済情勢の中、茨城県北地域の産業活性化を目的として（財）日立地区産業支援センターが一九九九年に日立市の出資で設立され、翌二〇〇〇年四月に施設がオープンした。

■写真1　産業支援センター外観

当時、本財団に課せられた使命は、前述したように地域中小企業の日立製作所からの自立支援であり、そのための意欲的な経営革新マインドを持つ経営者の育成とそれを支える技術の高度化であった。

開設に当たり、本センターの事業コンセプトは、次の五つの柱から構成されていた。

①それまでの成熟産業から新産業の集積地域を目指した「新産業創造事業」
②自立化を図るため中小企業独自の研究開発を支援する「新製品・新技術開発支援事業」
③現場技術者、設計技術者の能力向上を目指した「技術者などの育成事業」
④自社製品の販路開拓、新規受注開拓を支援する「経営・販売支援事業」
⑤経営者の意識改革を進める「啓蒙啓発事業」

そして、開設までにこれら事業を実施するために必要な施設の整備と人材の確保が進められた。

施設の面では、センターの中に研究開発室、試験評価室が設けられ、設計力向上を狙いとしてCAD・CAMシステムを整備し、新製品開発に必要な三次元測定器をなど各種測定器、試験評価装置なども設置された。また、スタッフの面では、各種事業を企画、運営する専門人材（コーディネーター）が、日立製作所のOBを中心に職員として採用された。

設立当初、産業支援センターは、事業はもとよりその存在すら地域の中小企業に知られていなかった。そのため、情報収集もかねて財団事業のPRに地域企業を訪問して歩いたのが財団職員の最初に行った仕事である。

これまでの事業展開と歩み

このような経緯でスタートした日立地区産業支援センターであったが、これまでの一一年間の事業を、三つの期間に大別して以下に概要を説明する。

Ⅰ期（一九九九～二〇〇三年頃）の事業の特徴的なものを挙げると、一つには、「中小企業実務アドバイザー派遣事業」があげられる。日立市には日立製作所OBを始めとして大手企業を定年退職した研究者、技術者、技能者が多数居住している。このOB達の専門知識を中小企業の経営改善に活用するシステムである。仕組みは、事業の趣旨に賛同する大手企業のOBをアドバイザーとして登録し、中小企業の要請に基づき適任者を廉価で派遣するものである。企業OBの有効活用と定年退職後の生き甲斐づくりの一石二鳥を狙った事業であり、中小企業からの派遣要請も多く、現在も当センターの主要事業の一つとなっている。

この時期のもう一つの代表的な事業に「ひたち未来塾」があげられる。この事業は、若手経営者や後継者の意識改革を図り、企業の体質改善、経営力の強化を進めることを狙いとしたものである。この塾の塾生たちは、この後、当財団の主要顧客となり、企業側から当センターの事業を支えていくことになる。

Ⅱ期（二〇〇四～二〇〇六年頃）に始めた事業の特徴的なものに、「創業支援施設MCO（マイクロクリエーションオフィス）事業」があげられる。この事業は、敷地内にインキュベーション施設を建設し、創業を目指している地域人材を入居させ、企業として独り立ちするまで育成するものである。廉価で個室を貸し出すとともに、創業に必要な技術、法務、経営ノウハウ等のセミナーや個別指導を無料で実施している。

また、この時期、販路開拓、受注拡大を目的に東京都太田区の産業プラザにおいて「ひたちテクノフェア

■写真2　MCO（インキュベーション）

ｉｎ東京」の開催を始めた。この事業は、日立地域の中小企業約一〇〇社の製品、技術力を京浜地区のユーザーにＰＲし、京浜地区の企業の技術ニーズの把握と受注のきっかけづくりを行うことを狙いとしていた。

■写真3　ひたちテクノフェアin東京

Ⅲ期（二〇〇六年頃～）は、現在につながる期間である。

現在、当センターの主力事業の一つに海外とのビジネスマッチング事業がある。大手企業の製造拠点の中国進出が進む中、中小企業においても中国の企業（日系、欧米系、中国ローカル系）はビジネスのパートナーとして必要不可欠な存在となってきている。当センターは、二〇〇六年に江蘇省蘇州市高新区（開発区）委員会と相互協力の覚書を締結した。これは、日系企業を誘致したい中国側と現地企業からの受注を狙いとする日立地域側の相互協力を取り決めたものである。この覚書の締結を機会に、数次にわたり、現地企業の視察を行う中国ミッション団の派遣や蘇州市で開催される工業展示会（ｅ―ＭＥＸ等）に出展し、受注案件の発掘を行っている。

また、最近、積極的に取り組んでいるのが人材育成事業である。当財団は、二〇〇九年度から現在の中期経営計画をスタートさせているが、この計画策定に先立ち、地域中小企業の経営者にアンケート調査を行ったところ、大きな経営課題として「人材育成」があげられた。「企業は人なり」「ものづくりは人づくりから」である。この要望を受けて、中小企業を支える人材の育成を柱に掲げ各種事業を推進している。その一つに「工場力革新人材育成事業」と銘打った事業（経済産業省補助事業）を展開しており、内容的には、新入社員から経営者までを対象にものづくりの基礎から経営戦略まで幅広い研修を進めている。

人材育成のもう一つの主要事業に「ひたち立志塾」がある。この事業は若手経営者や次期経営者を対象にしたゼミナール形式の塾である。世界経済から地域産業の問題まで幅広く考えるきっかけを作るとともに、日ごろ孤独になりがちな経営者達のネットワーク形成に役立っている。この塾は、一橋大学大学院教授関満博先生の係る全国の同様の経営者塾（二一か所）の一つでもあり、塾活動を通じ、全国各地の元気な経営者と交流することで、視野を広め、経営のヒントを得ている。二〇〇九年秋には、日立市において、この全国の経営者塾関係者を集めた「全国若手ものづくりシンポジウム」と「全国若手塾長サミット21」を開催したところである。

これまで三期に分けて事業の幾つかを紹介したが、この他にも創設以来継続して行っている事業に、中小企業の行う技術開発への支援があげられる。ものづくり中小企業へは経済産業省を始めとして行政の様々な支援策が講じられているが、その中でも要請の大きなものに開発資金の確保があげられる。中小企業といえども（むしろ中小企業だからこそ）競争力をつけるため、他社との技術の差別化、製品の高品質化が求められている。地域企業の開発情報をキャッチし、大学など研究機関とのマッチングを図り、そして開発に必要な資金を国、県の予算か

■写真4　技術者養成研修

ら獲得してくる。これまで当センターは、国（経済産業省他）の競争的資金を一二件、総額約八億円獲得し、管理法人として開発型中小企業の技術開発を支えてきた。開発案件を事業化（製品化）し、利益を出すまでの道のりは容易なものではないが、これまで係わった開発案件の中の幾つかは、製品化され、販売実績を上げている。

日立地域のものづくり産業の今とこれから

ここまで当財団の経過を概説したが、日立地域の製造業の現状は決して芳しいものではない。二〇〇八年秋のリーマンショック後の景気後退で日立地域の、特に自動車関連の中小企業は、受注の激減で大きな打撃を受けた。最悪期は脱したものの、以前の受注量までは戻らず苦しい経営が続いている。また、比較的堅調であった重電部門についても海外の原子力発電プラントの受注で韓国メーカーに競り負けたことは、大手企業のみならず関連中小企業にも先行きへの不安を感じさせている。

冷戦の終結による旧共産圏諸国の市場への参入とＩＴの発達による経済のグローバル化は、日本のものづくり産業を根底から揺るがしている。加えて、最近の円高で製造業の更なる海外移転が予想され、国内においては一層の産業空洞化が懸念されている。

これまでの当センターの一一年間の取り組みは、一言で言うと日立地域の「閉ざされた生産システム」の開国（オープン化）であった。親会社一社への依存から脱皮し、取引の多角化のための市場開拓とそれに必要な技術力や営業力の向上を進めてきた。全国的な傾向と同じく、日立地域においてもものづくり企業は減少しているが、残った企業の体質は変わり、変化に対応できる技術力と営業力を身につけつつある。

今後、一層のグローバル化により、受注先の海外移転や、海外調達比率が上がることは間違いない。地域中小企業も価格、品質面で海外企業との競争が激しくなり、取引先もよりグローバルな関係になっていくであろう。より厳しさを増す経営環境ではあるが、当センターの設立の経緯とその後の展開を振り返ると、地域の産業支援機関としてのこれまでの事業は、概ね妥当なものであったと考えている。

しかし、将来へ向けた課題は山積している。

■写真5　e-MEX（蘇州）レセプション

先進国の市場が飽和し、新興国の発展が目覚ましい中、ものづくり産業の世界では、もはや国内、海外といった区別自体が意味をなさなくなりつつある。グローバル化に対応できた企業は発展し、そして、企業のグローバル化を支える資源（人材、資本等）を集め育てた地域が活力を保てるのである。このことは、企業だけでなくそれを支える地域全体もグローバル化しなければならないことを意味している。

当センターは地元日立市が全額出資した財団法人であり、地域振興が真のミッションである。このミッションをはたすためには、今後、当センターは、企業の国際化だけでなく、地域社会の国際化を牽引する役割も担う必要があると思われる。そのため今後は、教育、福祉など各種行政の国際化へ向けた施策と連携しながら各種事業を展開することが必要になってくるものと考えている。

内山 茂身　プロフィール
（うちやま しげみ）

1954年茨城県日立市生まれ。
大学時代を除き日立市に在住。77年に日立市役所に土木職で入る。下水道、都市計画、道路建設、企画調整などの部署を経て日立市の出資団体（財）日立地区産業支援センターに勤務。
事務局長として、財団経営全般に携わる他、産学連携、創業支援の仕事を担当している。

特集3

つくば3Eフォーラムのめざすもの

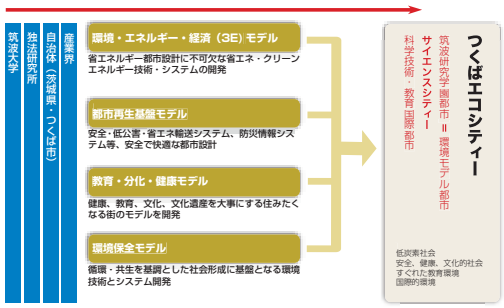
井上 勲
筑波大学大学院生命環境科学研究科教授
筑波大学学長補佐（特命環境担当）
つくば3Eフォーラム議長

つくば3Eフォーラム設立の経緯

つくばには、三一の国立あるいは独立行政法人研究機関があり、これは日本全体の政府関連の研究機関の約四割にあたります。民間も含めると、三〇〇を超える研究機関がつくばに集積し、約一七〇〇〇人の日本人研究者と約二五〇〇名の外国人研究者が研究に携わっています。まさに、日本の科学技術創造立国を支える最大の研究開発拠点です。

第三期科学技術基本計画（二〇〇六～）では、「筑波研究学園都市の大学、研究機関の連携、融合」と「国際化」を進めることが謳われ、省庁の縦割りのなかで、独法研究機関を結びつける接着剤としての役割が筑波大学に求められました。

筑波大学から独法研究機関に、連携の課題として、地球温暖化を解決し、低炭素社会を実現する「つくばエコシティー・イニシアティブ」を提案しました（図1）。議論を続けた結果、環境・エネルギー・経済（3E）の問題が喫緊の課題であるとの合意に至り、筑波大学と主要な独法研究機関（産業技術総合研究所、物質・材料研究機構、農業・食品産業技術総合研究機構、国立環境研究所）と茨城県、つくば市が合意して、二〇〇七年に、つくば3Eフォーラム委員会を設立しました。そして、つくばの連携、研究開発を通じて、二〇三〇年までにつくば市のCO_2排出を五〇%削減し、つくばの低炭素社会システムを「つくばモデル」として国内と海外に普及することを宣言しました。



■図1　つくばエコ（3E）シティー構想

つくば3Eフォーラムとつくば環境スタイル行動計画

3Eフォーラムの設立に呼応して、つくば市が、他に類のない「つくば環境スタイル行動計画」を策定しました。特筆すべきことは、計画の立案に、大学、独法研究機関の多くの研究者、地元の企業、そして、市内で活動を続ける市民代表のNGOの人たちが参加したことです。これだけの陣容で検討チームをつくれるのは、全国でもおそらくつくば市だけではないでしょうか。3Eフォーラムの委員の多くも参加しました。研究開発を目的とする3Eフォーラムとつくば市という行政の連携は、今後実験タウンの実現に向けて、さらに強化されていくと思います。実験タウンとは、つくば市を大学、研究機関の研究開発の実証のフィールドとして活用しようとするものです。つくば3Eフォーラムとつくば環境スタイル行動計画を通して、筑波研究学園都市は、新たな連携の時代を迎えています。

つくば3Eフォーラムの活動

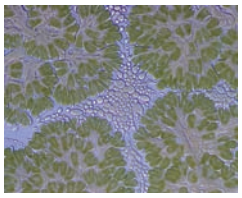
つくば3Eフォーラムでは、環境・エネルギー問題に関する課題に対して、太陽光、バイオマス、都市構造・交通、エネルギーシステム評価の四つのタスクフォースが活動しています。それぞれのタスクフォースは、筑波大学や3Eフォーラムの独法機関、自治体に閉じることなく、関連する独法研究所や企業の研究者が参加して、積極的な情報交換と活発な議論を行っています。現在のつくば市では、数年前までは考えられなかったさまざまなセクターの人達が混在して議論する光景が、あちらこちらで見られるようになりました。特に、バイオマスタスクフォースには市民のみなさんやNGOの団体も参加して、未来のつくばについて議論を続けています。

藻類オイルを基盤とするエネルギー開発

3Eフォーラムが進める「つくばバイオマスタウン構想」の一環として、藻類から石油に替わるエネルギーを生産する研究が進められていま

す。藻類のオイル生成能は大豆や油ヤシなどに比べて圧倒的に優れています（表1）。また、食料と競合しないために、藻類オイルを基盤とした低炭素社会の構築が期待され、世界で盛んに研究が進められています。科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業（CREST）の委託事業で、筑波大学と国立環境研究所が協力して開発してきたボトリオコックスという藻類（図2）を用いて、生産性の向上、生成技術の効率化、野外実証プラントの開発を進めています。

産業界との連携もはじまりました。二〇一〇年六月に、大学、独法、企業が参加して「藻類産業創成コンソーシアム」を結成し、オイル産生をはじめとして、石油化学工業への原料の提供、藻類による汚泥処理やバイオリファイナリーなどの分野で検討が始まっています。成功すれば、新たな産業が生まれ、産業構造が大きく変化していきます。つくば発の技術が日本を、ひいては世界を大きく変える可能性を秘めています。

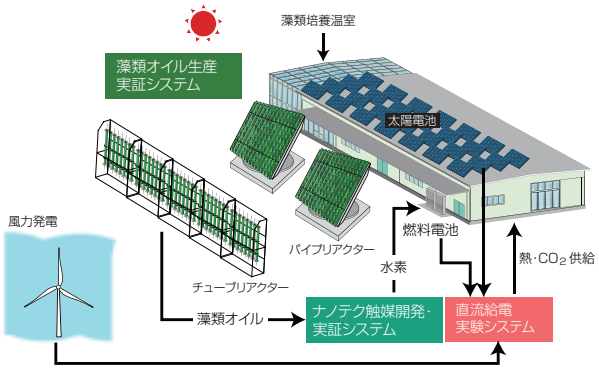


■図2　ボトリオコックス（透明な粒がオイル）

植物の種類	オイル生産（トン/ha）	必要な土地*（Mha）	米国の耕作面積に占める割合（%）
トウモロコシ	0.2	1,324	958
大豆	0.5	530	291
ベニバナ	0.8	331	182
ヒマワリ	1.0	265	146
アブラナ	1.2	221	121
アブラヤシ	6.0	44	24
微細藻類	47-140	5.6-1.9	1-3

* 米国の輸送に必要な燃料の50%をまかなう場合

■表1　陸上植物と藻類のオイル生産効率の比較（Chisti 2007より）



■図3　次世代エネルギー 実験・実証温室

3Eフォーラムから生まれた異分野連携―実験タウンD

藻類オイル生産のための実験実証温室が、二〇一〇年九月末に完成しました。この施設は、実は藻類の生産だけを目的としたものではありません。藻類オイルを高効率のナノテク触媒を用いて改質し、燃料はもとより、さまざまな物質を作る。水素も作る。水素を使えば、燃料電池で発電ができる。発電で生じた熱と二酸化炭素は藻類の培養に利用できる。生じた電気を直流のまま給電し、テレビやパソコン、その他の直流機器を動かす、という計画です。このアイデアは、つくば3Eフォーラムの議論から生まれたものです。

生物学とナノテク工学、エネルギー工学という、これまで互いに接触のなかった異分野が融合して、藻類オイルを出発点とする直流の給電システムを構築しようというものです。太陽電池や風力発電も組み込むことで、全体として再生可能エネルギーによるエネルギー供給システムを目指しています（図3）。これは分散型のエネルギー供給システムですから、藻類を殖やすことさえできれば、中国やインド、アフリカの奥地に至るまで、送電線のない世界のどこでも、エネルギーの自給自足、地産地消が可能になります。この夢のようなシステムは本当に実現できるのでしょうか。実証に向けた実験が来年から始まります。

私たちは、この実験を、つくば市環境スタイル行動計画で予定されている実験タウンDの一つとして位置づけて、進めたいと考えています。実験タウンDとは、実用化を目指す最先端の技術の実証に向けたフィールド実験のことです。そのコンテンツとして、さまざまなアイデアが3Eフォーラムで検討されていますが、藻類オイルを基盤とするエネルギー生産システムの開発が第一号ということになるでしょう。これが順調に進めば、つくばに藻類産業とエネルギー生産研究の国際的な拠点が構築できます。やがて、産業界が加わり、つくば発の新たな産業が育っていくと思われます。そのための成果をどう打ち出せるか、つくばの力量が問われています。

つくば3Eフォーラムのめざすもの

低炭素社会の実現には、すべての学問分野が総合的に関わっていく必要があります。エネルギー問題での連携の推進をきっかけに、交通や、教育、環境保全などのさまざまな周辺課題についても、筑波研究学園都市での連携と、国際的な連携を広げていきたいと思います。つくば3Eフォーラムは、つくば市を世界に開いた日本の科学技術の窓、そして低炭素社会のモデル都市として発展させる推進力としての役割を、引き続き担っていきたいと考えています。

井上 勲　プロフィール
（いのうえ いさお）
筑波大学大学院生命環境科学研究科教授
筑波大学学長補佐（特命環境担当）
つくば3Eフォーラム議長

沖縄県石垣市出身。東京教育大学理学部卒、筑波大学大学院生命科学研究科修了。国立公害研究所客員研究員などを経て、1983年筑波大学生物科学系講師、1990年同助教授、1996年同教授。その間、生命環境科学研究科長などを兼任。筑波研究学園都市の連携に尽力し、2007年からつくば3Eフォーラム議長、2010年藻類産業創成コンソーシアムを設立し、理事長を務める。
専門は藻類学。微細藻類の進化、系統の研究を通して、地球と生物進化に藻類が果たした役割を主張している。著書に『藻類30億年の自然史-藻類から見る生物進化-』（東海大学出版会 2005）他多数。日本植物学会賞特別賞（教育）、国際藻類学会 Type Christensen Prize（2007）他多数受賞。

特集4

大洗町から発信

日本初のユニバーサル・ビーチと大洗海の大学

ZICO・足立（大洗サーフ・ライフ・セービング・クラブ代表）

誰もが水辺を安全に楽しむために

茨城県の太平洋に面した大洗町は、白い砂浜に遠浅の渚が続く大洗サンビーチをはじめ磯浜、河川湖、沼等多種の水辺要素を有した自然に溢れる町である。この町では、地域資源を生かしたオリジナリティ溢れる地域づくりへの取り組みがなされている。

■写真1　IRBによる沖パトロール

大洗町で日本初の「ユニバーサル・ビーチ」を企画・運営し、「大洗海の大学」の設立に携わったのが、大洗サンビーチで活躍する「大洗サーフ・ライフ・セービング・クラブ」である。

同クラブは、「誰もが水辺を安全に楽しむ」を目標に誕生して以来、地域と一体化した活動によって、海水浴の安全を守り通してきた。また、ユニバーサル・ビーチの開設等を通して、新しい浜創りを試み、大洗町の地域づくりに協力してきた。

浜辺から始まる地域づくり

大洗サーフ・ライフ・セービング・クラブが正式に大洗サンビーチの浜辺のパトロールを始めたのは、一九九四年である。パトロールスタート時に、浜辺の活動を通して、「地域振興」と「情報発信」が重要だと考えた。そこで、「ライフセーバーと利用者が地域と一体化」する事によって地域の活性化につなげ、また、そのような理念に基づいた浜創りの実験的取り組みを各地に情報発信していくことを目標として掲げた。

きっかけは一九九三年、テストパトロールの際に目の当たりにした利用者のゴミ放置だった。ゴミはストレートに地域へのマイナスイメージに結びつくため、町職員や作業員が汗だくになりゴミを収集分別していた。当然、ゴミは、地域外から来た利用者のマナーの欠落から出たものであろう。自然の中にゴミを置き去る利用者の心を変えたい、旧態然としたわが国の海水浴場のイメージを変えて利用者とともに「オシャレで品位のある浜創り」が出来たらと強く願った。

利用者に、「浜を大切にしてもらい、浜に愛着を持ってもらう」そのためには、一緒にゴミを拾って共に浜を守ってもらうことが重要だと考えた。

こうして、浜創りの最初の試みとして、「浜にあるゴミを明日来る人に残さない」をキャッチフレーズとして、地元、行政と一緒になり、「クリーンキャンペーン」をスタートさせた。

当初は、必ずしもみんながみんな協力的でなかったが、今日では毎日多くの方々が参加してくれている。

■写真2　子どもたちも遊ぶ前に必ずゴミ拾い

また、ちょっとした海の知識でアクシデントを防げるように紙芝居を中心とした「セーフティーキャンペーン」、浜辺をより楽しむための「スポーツキャンペーン」も実施した。以降、毎年様々な取り組みにより、浜辺での楽しい「体感」を模索している。

■写真3　段差を乗り越え、浜辺へ（木製のスロープ）

日本初のバリアフリー・ビーチの誕生

一九九六年盛夏、歓声響くビーチの突堤で子どもの車椅子を押す汗まみれの母親がいた。

「お子さんは水着にならないのですか？こんなに暑いのに？」と聞くと、「勿論、海に入りたいですよ。だけど、この子は海水浴が出来ません。何故なら更衣するスペースと車椅子を預ってくれる所が無いからです。ですから、せめて海水浴場を見せて帰るんです。」と答えた。

■写真4　水陸両用車椅子で海を楽しむ家族づれ

誰もが安全に水辺を楽しむ事をライフセーバーの目標に掲げてきただけに、足元に気づかぬ自分の愚かさに愕然とした。

何がライフセーバーの職務であろうか？溺者を助けるだけなら犬やロボットにも出来るのではないか？その夜、大洗サーフ・ライフ・セービング・クラブのメンバーは、原点に返ってライフセーバーの目標を実現することを誓い合った。さっそく、来年度の車椅子更衣室用テントを購入しようという話になり、メンバー全員が持ち合わせの小銭を出し合った。無計画そのものではあったが、新しい試みに向けてメンバーが動き出した。

一九九七年夏、様々な幸運と大洗町の尽力により、大洗サンビーチで、日本初の「バリアフリー・ビーチ」を開設することができた。施設整備の面では、水陸両用車椅子（ランディーズ）とライフジャケットの貸出を実施し、スロープ、障がい者専用の駐車場・車椅子でも利用できる更衣室、シャワー室・トイレを設置した。また、運営面では、女性のライフセーバーが貸出担当になり、扱い方の注意や更衣室までの案内などをサポートする体制を構築した。施設建設にあたっては、地域の工務店から協力を得てスロープは木材で対応した。

専門家から見れば脆弱で、未完成な部分もあったと思うが、早期開設を優先した。何故なら、この取り組みが少なからず全国のアウトドアシーンにおいてハンディーを持つ方々の利便性向上という「波及効果」をもたらす先鞭になると信じたからだ。

結果、バリアフリー・ビーチが報道された翌日より、全国から利用者、関係者、マスコミが、ひっきりなしに大洗サンビーチに訪れた。

多くの利用者に喜ばれる

全体的に未完成な部分もあったため、利用者からの多少の非難も覚悟していた。ところが、意外にも利用された方々は、もれなく喜んでくれた。専門知識に乏しく失敗も多かったが、沢山の利用者が味方となり、アドバイスや応援をくれ、後押しをしてくれた。

バリアフリー・ビーチの開設により、生まれて初めて海に来たという方が大勢いた。何時間も飽きずに足

に波を受けるだけ、座って波打ち際にお尻を付けるだけで心から「楽しい」と言う方々に驚いた。我々が思いこんでいた海水浴の定義は何と狭いものだった、とか。

「いつもは置いてきぼりだが、やっと兄弟で来られた」と喜ぶ子を見て涙する親。母親の乗った水陸両用車のタイヤにまとわりつく幼児。家族連れや団体・そして若いカップルも増えていった。

車椅子ばかりでなく、視覚障がい等、内部障がいの方、足腰の弱った高齢者の方等、様々な方がスロープ等を利用する事によって、障がいのある方と接した大洗サーフ・ライフ・セービング・クラブのメンバーの意識もゆっくりと育てられていった。

バリアフリー・ビーチから、ユニバーサル・ビーチへ

一九九九年夏バリアフリー・ビーチからユニバーサル・ビーチに名称をチェンジした。「誰もが安全に水辺を一緒に楽しむ」ビーチを模索したいと考えたからだ。

また、水陸両用車椅子貸出をスムーズにして利便性を高めようと「サンビーチ・ユニバーサル会員」登録制度をスタートさせた（現在会員数八九一人）。

今シーズンもユニバーサル・プログラムとしてビーチゲーム、ヨガ、フラダンス、ストレッチ等様々なエンジョイチャレンジを試みている。特に毎週末行うユニバーサル・オープンウォーターは、シーズン最終に「オープンウォーター・リングス」と称し約一〇〇名が参加する大会を開催している。チャンピオンアスリートから泳げない方、様々なハンディーを持つ方々（五歳～九〇歳）が共に手を繋ぎ一つの輪を造ってからスタートする。

厳密に言えば「誰もが一緒に楽しむ」なんて無理なのかも知れない。それでも大洗サーフ・ライフ・セービング・クラブは、誰もが一緒に楽しむことができる浜創りにこだわり続けている。

何故なら、障がいがある人も、ない人も、様々な人が裸で集う浜こそが、ユニバーサルという観念のガラスなきショーウィンドーに成り得ると位置づけているからだ。誰もが浜辺で「一緒に楽しむ光景」が何らかのヒントとして他の地域の人々の脳裏へ微かにでもインプットされれば幸いだ。

大洗町にユニバーサル・ビーチを開設後、他の地域でも新たなユニバーサル・ビーチが誕生していた事に感謝する。

そして大洗サンビーチから感染し、増殖するユニバーサルイメージがこれからも少しずつ社会を変えていくかもしれないと妄想している。

「大洗海の大学」の開設

バリアフリー・ビーチ開設初年度に「海辺から発信できる文化」の可能性を強く確信した。大洗町は、多種の水辺要素（砂浜、漁港、マリーナ、ボート、磯浜、河川、沼、水田）に囲まれており、水辺から文化を発信する可能性を多く秘めている。しかし、子どもが海で遊ばない、漁業後継者が減少しているなど、人々が水辺から遠ざかっている現実もあった。

水辺の資源を生かさねば勿体ない、人々の水辺に対する意識を変えたいと考え、一九九八年、地元小学校を対象とした「ジュニア・ライフ・セービング・プログラム」を開始し、海という自然資源を教育資源に変換し関東広域（特に海無し県）

■写真5　誰もが一緒に海を満喫するフラダンス教室

に提供すべきと提唱した。二〇〇二年、様々な方の思いが結集し、町全体をフィールドとした「海の大学」設立準備活動が開始された。ネーミングとして月並みの名称では真面目な印象をもたれてしまう・・・。まさかの「大学」とふざければ、「楽しい事しかやらない」「遊びの中から学ぶ」というテーマが逆に読み取れるのではとの考えが選択された。

■写真6　サーフィンを体験！ 楽しみながら波を学ぶ

教授陣は「遊びの達人」（地元の変わり者？）を集めただけ。すごい面子になった。

大洗海の大学の愛称ＡＮＣＯは茨城の名物である鮟鱇に因んだものだが「アドベンチャー・ナビゲーション・クルーｏｆ大洗」の頭文字。和訳は「冒険に誘（いざＮＥＷ）う者よ！乗船せよ！」だ。

二〇〇四年に七学部（浜学部・風学部・波学部・渚学部・川学部・緑学部・釣学部）を擁した「ＮＰＯ　大洗海の大学」が開校した。ＮＰＯであるからには、行政が踏み込めない内容、対象、地域を網羅し、観光資源としてイメージアップにつながる存在でなくてはならない。

■写真7　海でおおはしゃぎ、1才～3才のジュニア教室

海に囲まれた我が国でありながら通年活動する海の組織はあまり例がなく、全国から注目を浴びた。

当然、良き事をしながらのＮＰＯ経営は多くの困難が伴うが、現在も町のしっかりしたバックアップを受けながら、この実験的な海の梁山泊は進化し続けている。

浜辺から社会を変える

大洗サーフ・ライフ・セービング・クラブは、浜辺から社会を変えられたらという思いを持ちながら、さらに、微力を注ぎつづけている。クラブの許容量は常にレッドゾーンを超えているが、メンバーのモチベーションは衰えない。もちろん、利用者の笑顔に支えられての事だが、その根底に地域との一体化がある。年間を通して町が常に励ましてくれる。行政は無論のこと、住民や業者、浜関係者がライフセービングを理解し、有形無形の手を差しのべてくれる。地域や利用者との心の結びつきこそが、「浜辺から社会を変える」ための原動力である。そして、これが、ライフセービング活動の一つの答えではないだろうか。

◆「大洗サーフ・ライフ・セービング・クラブ」公式ＨＰ　http://www.elnino.jp/

（我々は、関東近県の参加者、賛同者、応援団を募集しています。）

◆ＮＰＯ法人「大洗海の大学」公式ＨＰ　http://www.anco-oarai.org/

ＺＩＣＯ・足立　プロフィール

（じーこ あだち）

本名＝足立 正俊（あだち まさとし）

通称＝海族　ＺＩＣＯ船長

趣味＝サイクリング、ピクニック、雲集め（写真）、スポーツ全般（中学、高校、大学、社会人クラブにて、数種目のスポーツコーチ、監督歴任）

18歳にてプールガードを始め水泳指導する傍ら海に遊ぶ。27歳より海のライフセーバーとしてパトロール開始。オーストラリアへ派遣され我が国初のＬＳ指導員としてライフセービング協会設立に携わる。1995年、協会理事を辞して大洗サーフ・ライフ・セービング・クラブ設立。現在、日本ライフセービング協会スーパーバイザーとして後進の育成に携わる。

1 2 3 4 5 6 7 8

坂東の原風景
横浜港

広報委員会　荻島 晃

現在、外貿コンテナ取扱個数で東京港に次いで国内第二位の横浜港は、一五〇年前は半農半漁の寒村、横浜村だった。横浜港の歴史と、横浜の埋立事業の経緯を空中写真とともにたどった。

横浜港の開港

一八五八年、日米修好通商条約の締結により、神奈川の開港が決定した。開港を控えた横浜では、外国人居留地・波止場・交通路などの整備が進んだ。

翌年、横浜港が開港すると、商人が大挙して押し寄せ、程無くして、生糸を中心とする輸出も活発化する。横浜は急速に賑わいをみせ、一〇年も経つと、現在の馬車道・日本大通り・中華街などの原形はほぼできあがっていた。

西洋文化の吸収

開港以来、横浜は外国との窓口となり、西洋文化・近代技術を吸収していく。

一八七二年の新橋～横浜（現桜木町）間に開通した鉄道を筆頭に、下水道・街路・ガス灯などの近代施設が導入された。また、野球・ビール・ハムといった、現在の生活に馴染み深い必需品や嗜好品などが多く入り、やがて全国に広がっていった。

横浜港の近代化

横浜港の最初の築港工事は、一八八九年に開始された。この時、鉄桟橋（現大さん橋）や東・北水堤が築造され、陸上では構内鉄道や税関庁舎などが整備される。尚、鉄桟橋が築造されるまでは、大型船は接岸できず、沖合からはしけ（小型船）を使って貨物や人を運んでいた。

その後も近代的な港湾施設を整備するため、明治後期から大正にかけて、現赤レンガ倉庫がある新港ふ頭を初めとして、埋立事業が盛んに行われた。特に、浅野総一郎ら実業家により行われた川崎から鶴見にかけての大規模な埋立地は、現恵比須・宝・大黒町の埋立造成地とともに、京浜工業地帯の基礎となっていった。

1　みなとみらい地区横浜ランドマークタワーから新港ふ頭を見下ろす
2　大さん橋国際客船ターミナルに停泊する豪華客船『飛鳥II』
3　横浜港案内図
4　1947年 空中写真【米軍撮影】
5　1972年 空中写真【国土地理院撮影】
6　2004年 空中写真【国土地理院撮影】
7　昔の面影を残した赤レンガ倉庫の様子（新港ふ頭）
8　日本大通りのイチョウ並木（関内）

関東大震災と太平洋戦争

開港から、長い年月と巨費を投じて築き上げてきた横浜港であったが、関東大震災（一九二三）により、壊滅的な打撃を受けてしまう。しかし、復旧工事は急速に成し遂げられ、数々の名所（神奈川県庁庁舎や横浜税関庁、震災による瓦礫を利用して造成した山下公園など）も誕生した。

戦時は度重なる空襲を受け、横浜の市街地は焦土と化す。加えて終戦後は、港湾施設の九〇％と市街地の中心部が米軍に接収され、横浜の戦後復興を遅らせた。

一九五一年にサンフランシスコ講和条約が結ばれると、接収が解除され始める。また、この年、横浜港は国から横浜市に移管され、戦後の新たな発展への一歩を踏み出すことになる。

復興とコンテナ船への対応

戦後の埋立事業は、大黒町地先や山下ふ頭より始まり、根岸湾（空中写真の範囲以南）まで拡大していく。そして、根岸線（桜木町―磯子、一九六四）も開通し、京浜工業地帯の延長として臨海工業地帯が誕生、横浜港の重化学工業化は一層進んだ。

このころ、海運における物流革新で、コンテナ船等が出現する。コンテナ化と貨物量の増加への対応が求められ、本牧ふ頭や大黒ふ頭が造成されるとともに、陸上の道路網等が次々と整備されていった。

近年では、コンテナ船の超大型化に対応するため、大水深・高規格の岸壁を有するコンテナターミナルの建設やメガ・ガントリークレーンの整備が進められている。

都市再開発―みなとみらい21

横浜の都心部は、従来、関内・伊勢佐木町地区と横浜駅周辺地区に二分されていた。そのため、この二つの地区を一体化することで都市再生を図ることを目的とした都市再開発プロジェクトが「みなとみらい21」である。プロジェクトは一九八〇年代に本格化し、現在も推進中であるが、魅力ある街づくりが進められている。

開港以来、変化し続け、発展してきた横浜港。今後われわれにどんな姿を見せてくれるだろうか。

【参考文献】
『横浜の埋立』横浜市港湾局臨海開発部編
一九九二年
『わたしたちの横浜』横浜市教育委員会
二〇〇九年

六郷用水

広報委員会　新屋 沙織

四〇〇年前から続く水路

江戸時代の水の流れを今に引き継ぐ清らかな水路が、東京都大田区にあります。東京都区内と聞くと、コンクリートジャングルというイメージがありますが、そのようなイメージとはかけ離れ、東京に残された豊かな緑と歴史を今に伝えていく空間となっています。

「六郷用水」と呼ばれるその水路は、江戸時代に開削された灌がい用水である六郷用水を親水空間として、復元した空間です。過去に作られた土木物を今に遺し、人々の憩いの空間として活用しているという点で六郷用水は、「LOHASな土木」といえるのではないでしょうか。

六郷用水の歴史

六郷用水は、六郷領（大田区の平地地域）の灌がいを目的とし、江戸時代初期に、徳川家康の新田開発政策の一環として、幕府代官小泉次太夫により開削された農業用水路です。六郷用水は、一四年の長い年月を費やした大工事の末、一六一一年に完成し、全長は約三〇㎞、灌がい面積は一五〇〇haに及んだと言われています。六郷用水の開削により、約五〇の村々が恩恵を受けることとなり、以後三〇〇年あまり、大田区や世田谷区の農民の生活になくてはならない用水路として利用されてきました。

■江戸を偲ばす六郷用水（写真中下：再現された足ふみ式の水車）

その後、時代の流れと共に、用水流域は宅地へと変化し、六郷用水も昭和初期には用水路としての使命を終えました。さらに、下水道の普及により、そのほとんどが埋め立てられてしまいました。しかし一九八〇年頃、地元住民から、歴史や文化を伝える空間として六郷用水を保存すべきだという意見が出され、その意見を受けて、大田区土木管理課が立ち上がりました。水路を復元出来る箇所は、親水空間として整備、水路復元が難しい箇所は、緑道や歩道として再整備することとなりました。

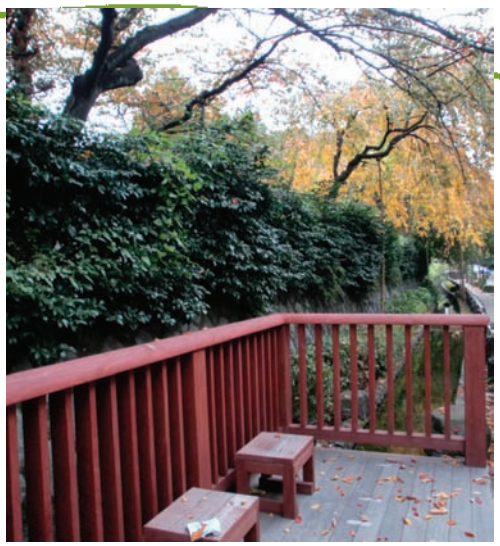
新しい六郷用水の魅力

新しく生まれ変わった六郷用水の魅力、それは、「歴史を伝える工夫」「自然資源の活用」「心地良い休憩スペース」だと思います。実際に散策した時の目線で、これらのポイントを紹介していきます。

親水空間として水路が復元されている箇所は、東急東横線・多摩川駅～東急多摩川線・鵜の木駅までの約二㎞です。多摩川駅を降り、南東に向かって歩き、トンネルを抜けると

■崖からしみ出る湧水

■綺麗な水の中を魚が泳ぐ


■紅葉を見ながら一息

■歴史を伝えるサイン

六郷用水が姿を現します。六郷用水は、国分寺崖線沿いに流れているため、緑深く、森林浴気分で水路沿いを散策できます。

さらに歩くと、左手に東光院というお寺が見えます。ここには、「足ふみ式の水車（じゃばら）」があり、かつての六郷用水の雰囲気を偲ばせます。また、「六郷用水跡」と書かれた標柱や、地域と六郷用水の関わりを示した歴史物語が書かれたサインが設置されており、かつての六郷用水の姿を今に伝えてくれます。

六郷用水が国分寺崖線に沿って整備されていることで、緑が豊かなのはもちろん、さらに恩恵があります。それは、「自然湧水」です。六郷用水の水は、崖から出る自然湧水を活用しているのです。そのため、水は透明度が高く、水路の中を覗くと、魚が泳ぐ姿や色々な生物を見ることができます。蛍のえさとなる「カワニナ」という貝も生息しているとのことです。

都区内の自然湧水ポイントは一六箇所しかないとのこと。非常に貴重な自然の恩恵を受けた水路といえます。

そして所々に、水辺の休憩スペースが設置されています。水面を眺め、水音を聞きながら、一息つくことができます。

郷土として愛される空間

六郷用水沿いを歩いていると、都区内とは思えないほど、ゆったりとした時間の流れを感じます。そして、春にはしだれ桜、夏には青々とした木々と蝉時雨、秋には色取りどりの紅葉、四季折々の日本の美しさを刻々と感じさせてくれます。雨の日には蛙が休み、綺麗な水の中を魚が悠々と泳ぎ、川海老が遊ぶ、かつての東京に存在し、そして今の東京が失いかけている自然空間を垣間見ることができます。小さい頃小川で遊んだことを思い出す人も多いのではないでしょうか。

散歩する人、親子で水の中を覗く人等、多くの人がこの場所に魅力を感じ、集まります。かつては用水路として人々の生活に潤いを与えた六郷用水は、機能を変えた今もなお、都会で暮らす人々の心や生活に潤いを与えています。

■親子で水の中を覗く

六郷用水は、昭和五三年に「手作り郷土賞」を受賞していますが、この地域の郷土として、この先もずっと地域の人々に受け継がれていくのでしょう。

地域の歴史や文化を伝えるために

土木事業と聞くと、橋を作る、道路を作るというイメージが強く、近年は土木事業そのものを批判する傾向もあります。しかし、土木事業は、六郷用水の再整備のように、地域の歴史や文化を次世代に紡いでいく役割も果たします。

建設コンサルタントとして、その地域の歴史や文化を伝え、郷土として人々の心に刻まれるような空間を作る手助けをしていきたいと感じています。

【参考文献】
・「六郷用水物語」大田区土木部管理課編／一九九一年
・「地域から歴史をさぐる　六郷用水をたずねて」大坪省吾著／一九九四年
・大田区建設協会　エコ
・六郷用水の会　エコ

杉下 創史さん

共和コンサルタント株式会社
設計部設計第4課

地域に根付いた町医者を目指して

聞き手―これまで一番心に残っている仕事は何ですか。

杉下―コンサルタントの技術者として一四年目、現在は道路設計業務を中心に担当しています。平成一二～一三年頃に担当した首都高王子線関係の道路設計業務で一年半の間、京都の施工業者さんとともに仕事をした事が、それまで施工現場に直に触れる機会が無かった私にとって、非常に良い勉強の場となりました。また、仕事を通じて設計者と施工者の互いの立場を理解しあうことができました。

聞き手―多くの経験を積み重ねておられるようですが、コンサルタントの仕事の魅力はどこにあるとお考えですか。

杉下―ゼロの状態から設計が始まって、ある程度のレベルまで産み出していく過程が魅力です。また、誰がやっても同じ答えにならない、唯一無二のものを世に送り出せるのも面白いですね。ただし、我々のエンドユーザーはその地域の人々ですので、常にその点を意識しながら仕事と向き合っています。

聞き手―首都高速道路株式会社から表彰を受けた業務「中央環状新宿線安全施設等検討（平成一八年度）」について、その概要を教えてください。

杉下―この業務は、首都高速中央環状線熊野町ＪＣＴ～西新宿ＪＣＴ間の暫定供用に向け、それに伴って必要な標識等を検討する業務でした。供用開始日が決まっていたので、時間的なプレッシャーや作業量の多さに苦労しました。打合せが終わると、チーム内でどう仕事をこなしていくか、帰りの電車でずっと話していました（笑）。さらに、業務途中で出入口名称をアンケート募集することになり、沿道の住民に配布するリーフレットを作成したりしました。その後、出入口名称が決まるとそれまでの図面や資料を全て書き直したり…、など、ハードでしたがやりがいのある業務でした。本業務には約一年間携わったのですが、その間、発注者とお互いの問題意識を共有できたことが評価頂いたものと考えています。建設コンサルタントとして一社のみの表彰でしたので、感激ひとしおでした。

聞き手―杉下さんはこれからどの様な技術者を目指していますか。

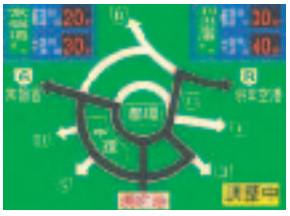
杉下―埼玉県内を中心に仕事をしているので、県内のことは、聞けば何とかなる町医者の様な技術者になりたいですね。たとえば、地域に精通した交通渋滞対策や交通事故の安全対策、橋梁点検や長寿命化など、地元の構造物について永続的に見ていくなど、実に町医者的な土木技術に可能性を感じています。その為には、今まで以上に多くの業務を通じて、経験値を高めていくことが必要かと思います。

聞き手―今後挑戦してみたいことはありますか。

杉下―欧米で見かける信号機の無い交差点、ラウンドアバウトを設計してみたいです。海外では増えているのに日本ではなかなか見かけません。夢の実現性云々はともかく、外国の基準書を読むと面白い発見がありますし、見聞が広いのに越したことはありませんから。また、大規模なインフラ整備が出来にくい時代ですから、最小限のコストで可能な地域の交通計画や、構造物等の保全等に、携わっていきたいと思います。

聞き手―最後に自社のＰＲをどうぞ。

杉下―よく言われるように業界状況は楽観できませんが、これまで国道事務所等で行ってきた実績を地元で広げていきたいですね。我社はこの業界の今の傾向と同じで、若手が少ないのですが、その点経験豊富なベテランが多く、中堅の私としてもその技術力や経験に助けられています。仕事は正直言ってハードですが、若い技術者が成長できる会社だと思います。



■図1　検討した標識（図形情報板）

■図2　業務成果の図面（案内・規制標識、安全対策図）

T字型の技術者を目指して

聞き手―これまでの経歴をお聞かせ願います。

増屋―平成六年に入社した当時は、浄水場や下水処理場における機械の実施設計を担当していました。その後、上下水道施設のデータベース管理システムの開発に携わった後、平成一五年から上下水道事業におけるアセットマネジメント手法の導入に関わっています。

聞き手―今までで印象に残っている業務はありますか。

増屋―入社した頃、東京都下水道局の砂町水再生センターの機械の実施設計を担当しましたが、自分が設計したものがそのまま形になった時は感動しました。また、最近では「下水道事業におけるストックマネジメントの基本的な考え方(案)」や「下水道長寿命化支援制度に関する手引き(案)平成二一年度版」等、国が発行するマニュアル類の作成に携わったのですが、それらを色々な方に活用して頂いており、少なからず、下水道事業にお役に立っていることがうれしいですね。

聞き手―現在では、アセットマネジメントの中心的な存在ですが、最初はどのように取り組まれたのですか。

増屋―当初は、上下水道事業でアセットマネジメントを実施している事例がなかったので、道路や橋梁等、他の公共事業に関する文献を収集したり、実際に取り組まれている自治体の担当者とディスカッションを行ったりして、上下水道事業への適用方法を検討しました。また、アセットマネジメントには財政的な知識が必要で、当初は貸借対照表や減価償却といった言葉がなかなか頭に入ってこなかったのですが、経理部の社員に教えてもらいながら頭をほぐしていきました。

聞き手―建設コンサルタント技術者の魅力とは何でしょうか。

増屋―発注者を始め、様々な人が関わって事業が動くのですが、その全体フレーム作りに関われることが建設コンサルタント技術者の醍醐味だと思います。また、上下水道に限ったことではありませんが、日本における社会資本は"建設"から"管理"に比重が移っており、会社も技術者も時代の趨勢に合わせて柔軟に切り替えていく必要性があります。例えば自治体の財政運営もサポートするなど、我々は土木技術者、機械技術者としてだけではなく、事業全体をサポートするような役割も求められていると思います。

聞き手―求められる役割が変化していますが、増屋さんが目指す技術者像とはどのようなものでしょうか。

増屋―先の話にも関連しますが、個別の技術だけでなく、マネジメントに関する技術を有する技術者を目指しています。その実現には核となる技術を持ちつつ、その周辺の知見も有するT字型の技術者となるのが理想ですね。現在、部内で月一回程度、色々な技術を題材にした勉強会を開催しており、そうした場で他分野の知見を積極的に蓄積するようにしています。

聞き手―最近の代表的な業務をご紹介下さい。

増屋―平成二〇～二一年度にかけて、福岡市の河川と下水道に対するアセットマネジメント業務を担当しました。PDCA管理サイクルに基づいたマネジメントの推進を実現する施設の維持管理及び改築更新計画を策定していくのですが、どの施設を優先して改築していくのか、市民への説明責任も踏まえた定量的な評価が求められました。これまでの施設の維持管理は、事後保全的な色合いが強かったのですが、これからは、施設の破損などのリスクを考慮した事業計画の策定と予防保全的な管理が重要となると思います。

聞き手―最後に、これからの技術者にアドバイスをお願いします。

増屋―自分の場合もそうだったのですが、二〇代はコアの技術をとことん突き詰めるべきだと思います。若い時はT字型のーの部分をしっかり身に付け、三〇代四〇代以降は知見を広げていくことが大切です。私自身、これからもそのように心掛けたいと思っています。

■出典：福岡市下水道局HP

増屋 征訓さん

日本上下水道設計株式会社
東部支社東京総合事務所
アセットマネジメント部　部長

聞き手：広報委員会　遠藤 徹也

支部紹介 関東活動

「年年歳歳　花相似　歳歳年年人不同」これは漢詩の一節です。自然は毎年同じように春になれば春の花が咲くが、人は毎年必ずしも同様ではなく常に進化するものである、との意です。

関東支部の活動も世相を反映し徐々にではありますが様変わりしています。昭和五十七年十一月に現在の「支部報」第一号が発刊されました。当時は「建設コンサルタンツ協会関東北陸支部」と称し現在の発注者との「意見交換会」は「懇談会」と称し、主に支部サイドが陳情書を提出・説明することが第一義的な位置付の様でした。

各種の講習会・研修会も会員限定での催事でしたが、近年は会員はもとより発注者、学生等、非会員を含む公開型のものに様変わりしています。今回は各種講習会・研修会の中でも、「技術者フォーラム」に焦点を合わせて紹介致します。

「技術者フォーラム」は平成二年度に「第一回技術代表者会議」と称して同年九月二十一日に東医健保会館大ホールで開催されました。八十九社・一一四名の参加があったと記録されています。プログラムを見ますと、「建設コンサルタントの技術者のあるべき姿」・副支部長、「建設コンサルタントの現状と要望についての解説及び活動報告」・業務部会長、「ＡＴＩ構想」と今後の課題」・企画委員長、「支部及び技術委員会の活動報告」・技術委員長、「パネルディスカッション」では人材を確保し、育成するにはどうすればよいか、成果品の品質を確保するにはいかにあるべきか、をテーマとしたと記録されています。

平成八年度より現名称である「技術者フォーラム」に改称し今年度で第二十回となりました。平成二十二年十月二十八日に東医健保会館大ホールで開催し、会員九十六社・一六九名、非会員三社・五名、行政八機関・二十二名、合計一九六名の参加を得て次の内容で開催されました。

中間報告「設計ミス要因の構造化と必要な対策」・支部品質向上推進特別委員会委員長、研究報告「現実的で有効な照査ツールと工程管理方法」・支部技術委員、パネルディスカッション「設計ミスを考える」となっています。初回と今回のプログラムから、我が協会にとっては「品質の確保」＝「設計ミス」の問題は永遠のテーマであることが推察出来ます。

事務局だより

平成二十二年の夏は、猛暑日が続き、皆様方は体調管理に苦労されたのではないかと思います。熱中症の予防のために、水を携帯している人も多く見かけました。私も毎日のように東京駅、八丁堀駅、越中島駅等で下車し事務所のある神田まで、一時間程度歩いていますが、真夏はペットボトルを携帯し水分を補給しながら来たり、途中喫茶店等で一休みして出社したりしていました、それ程今夏は異常な暑さでした。

毎日、事務所まで遠回りして歩いて来ると、いろいろな発見があります。隅田川に架かる昭和三年竣工の清洲橋や永代橋の美しさの再発見、またそこから隅田川越しに見る建設中の東京スカイツリーは一見の価値があります。事務所から歩いて十分程度のところには、明治十年に築造された石造アーチ橋の常磐橋が現存しており、道路を挟んで反対側には明治二十九年に竣工した石積みレンガ造りの日銀の本館があり夜になるとライトアップされています。もっと近くには事務所の前の通りを三十秒程の所に、一橋徳川家の表鬼門除けとして祀られていたといわれる出世不動尊があります。事務所にお越しの際または帰りに、ちょっと寄り道するといろいろなものを発見できます。それほど事務所の周りは歴史を感じる街であり、雑然としていますが温もりのある街です。

（事務局長　久保谷伸博）

地域委員会だより～茨城地域委員会

変貌するつくば

■ つくば駅周辺の紅葉

市内の街路樹が色づきはじめ、研究学園都市内も紅葉の時期となりました。今年の夏の暑さは特に厳しくさらに秋を飛び越し一気に冬がきたかと思うような天候であったため、紅葉もひときわ鮮やかに感じられます。

茨城県はご存じのように太平洋に面し、「土地が広く、土が肥え、海山の産物も良くとれ、人々豊かに暮らし、常世の国のようだ」と常陸国風土記に記されており、古くから多くの人々が豊かに暮らしてきた所です。ここでは、急激に変貌したつくば市を紹介します。

陸の孤島であったつくば市は2005年8月に開業したつくばエクスプレス（ＴＸ）で首都圏の秋葉原と45分で結ばれました。全線立体化構造物であり、事故遅延もほとんど無く快適な交通手段となっております。センター地区はつくば駅周辺にあり、ペデストリアンデッキが縦横に整備され、各種の商業施設や国際会議場等の公共施設も集積しています。都市景観においては、地中に共同講が埋め込まれ電線等が無くすっきりした景観を呈しています。また、駅周辺に存在する多くの公園は人々に潤いを与えています。私がつくばに赴任し、まず驚いたのは、多くの公園、豊かな緑と数多くの医療施設です。全国的な医師不足で茨城県でもその状況は変わりませんが、つくば市内においては、何と多くの病院等が存在するのかと驚きました。駅近くのビルにおいては、各フロアに専門の医院が同居するビルもあります。また、最近では、「パンの町つくば」としておいしいパンを提供するおしゃれなお店も沢山できております。

つくばには、国土交通省の各研究機関をはじめ各種の研究所があり、仕事でいらっしゃる事はあるかと思いますが、他にも、豊かな景色や温泉等もあります。休日にも、新たなつくばを体験し、リフレッシュしに来てみませんか。つくば市はもちろんのこと、まだまだ見所満載の茨城県にも是非、足を運んでみてください。

最後に茨城地域委員会ですが、総勢10社のメンバーで活動しております。その内3社は地元に本社のある地域からの会員・研究員であります。他県に比べ地元コンサルタントの参加が少ないのが悩みです。今後、地域コンサルタントの積極的な参加を期待しているところです。

（2010年秋）

茨城地域委員会　委員長　牧野 均（株式会社　長大）

編 集 後 記

◇颯爽と、そんな言葉がまさにピッタリの渡辺裕之さんでした。インタビューの楽しい時間はあっという間に過ぎ、凝ったサインにビックリする一同に、一言「人をハッとさせることばかり考えてますから」。うーん、発想が違うなあ！（浅野）

◇ブランドやイメージにまつわるランキングが巷に溢れるこの頃、茨城県は？そんな問いに向かい合った座談会。今号の切り口は「茨城から生まれた潮流」だが、見栄より実質という古くて新しい生き方を茨城から感じた。（遠藤）

◇今回はいばらき市を担当した。森ビルの取り組みに驚き，取材をしていると、ナント『六本木ヒルズの屋上で田植えをしこの秋も稲刈りをする』とのこと。秋の稲刈りに誘ってもらったのに，支部からは参加できず、残念！（稲田）

◇今回は「特集3」の担当をさせて頂いた。ヒアリングで井上先生のお話をお聞きしていく中で茨城県のつくば市は世界の頭脳、日本の頭脳として重要な役割を果たしていること、そして市全体がその頭脳を大切にして育てていることが良くわかりました。（若松）

◇「伝えきれないほどたくさんの魅力があるのに、なぜか伝わらない……」茨城の抱えていらっしゃる悩みはまさに私たち建設コンサルタント業界と同じでした。今年は共に兎のように大きく飛び跳ねましょう！（趙）

◇初めての広報誌作成。戸惑うこともありましたが、何もないところから、皆で協力してひとつのものを作り上げることは、とてもやりがいがありました。また、ユニバーサルビーチの取材で、想いを実現させていくことの偉大さを実感しました。（新屋）

◇軽い気持ちで『坂東の原風景』の題材を横浜港の埋立にしましたが、原稿を書き始めると、江戸末期まで歴史を遡ることになってしまいました（開港１５０年）。しかし，横浜港の成り立ちを知ることができ、面白かったです。（荻島）

◇広報委員としても関東人としても新米でしたが、本号の制作に携わるなかで関東の魅力、茨城の魅力に触れることができたと思います。次号も乞うご期待！！（飯尾）

【グローカル関東　制作者】

広報委員会

委員長	浅野 泰弘	セントラルコンサルタント(株)	委　員	趙　学龍	八千代エンジニヤリング(株)
副委員長	遠藤 徹也	大日本コンサルタント(株)	委　員	新屋 沙織	(株)オリエンタルコンサルタンツ
委　員	稲田 栄作	東京コンサルタンツ(株)	委　員	荻島　晃	日本上下水道設計(株)
委　員	若松 孝至	(株)建設環境研究所	委　員	飯尾 昌和	(株)日本港湾コンサルタント

グローカル関東　Vol.4 January 2011

発行日　平成23年1月1日発行

編　集　広報委員会

発　行　JCCA 社団法人 建設コンサルタンツ協会 関東支部　〒101-0047　東京都千代田区内神田2-7-10　松楠ビル4階

Phone…03-5297-5951　Fax…03-5297-5952　http://www.jcca-kt.jp

レイアウト制作印刷　株式会社 大　應

JCCA
関東支部